

『発心集』第七「空也上人脱衣奉松尾大明神事」をめぐる諸問題

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/23700 |

『発心集』第七「空也上人脱衣奉松尾大明神事」

をめぐる諸問題

藤 島 秀 隆

文献に現われた「上人」の最初期^在の一人であり、「市聖」・「阿弥陀聖」と呼称された空也上人光勝（以下空也と記す）は、市井に隠遁、民衆と共に歩み生きたが、空也の生涯は大別して二期に分ち得る。天慶元年（九三八）京に入り念仏を民衆に勧め、市聖などと呼ばれた時期を主とするいわば私度僧期、天曆二年（九四八）比叡山に登り、天台座主延昌について受戒、光勝という大僧名を得てから入滅までのいわば官度僧期とである。

空也をめぐる説話は、右の二期に彩られ形成されていると思われる。かつて私は、中世説話集及び高僧伝収録の空也に関する個々の説話の項目、伝承、類話の有無等について指摘したことがある。項目のみ列挙すると、(一)空也上人と松尾明神との対面説話。(二)空也上人の臂の曲つたのを余慶僧正が祈り直したという靈験奇瑞説話。(三)山中物さわがし説話・化人説話。(四)類話の全くない単独説話。(五)千観内供通世籠居説話（副次的な説話）の五群の説話である。例えば、(一)の説話は官度僧としての空也に焦点が当てられ、(二)の説話は私度僧空也を語った説話と言える。また、(一)の説話は私度僧から官度僧にかけての時期の空也を描き、語っているが説話の成立は十一世紀中頃（後述）かと考えている。

本稿では(一)の説話を取り上げ、『百座法談聞書抄』収録の本話を

めぐる問題点をも含めて、説話の形成及び伝承等の諸問題について考察を進め論述したいと思う。

二

『発心集』(第七)に次のような空也上人の話が載っている。

空也が雲林院に住んでいた頃のこと、七月頃、京都に用事があって、大宮大路を南下していたが、ただ人とは思えぬ人が寒さに震えているのに出会った。不審に思っていたが、「己は松尾の大明神なり。妄想顛倒の嵐はげしく、悪業煩惱の霜あつく侍る間、かく寒たへがたきなり。若し、法華の法施を得せしめ給はむや」と言った。空也が承諾して、「此の自分が四十余年間起き伏し立ち居に、法華経を読みしめた垢の付いた小袖を奉ります」と言った。大明神は喜んでその小袖を身につけ、「今はこの法華の衣を着て、大変暖かになった。これより後は、仏道成就の口までお守り申し上げましょう」と約して、空也を伏し拝んで立ち去った。

この話は、源為憲の『空也課一卷并序』・慶滋保胤の『日本往生極楽記』等の先行空也伝には収録されていない。左に掲げる諸書の成立年代から考えて、『百座法談聞書抄』が初出と思われる。同じ話は『宝物集』・『古事談』第三・『雑談集』巻第九・『三国伝記』

卷六・『元亨釈書』卷第十四・『本朝神社考』・『本朝高僧伝』・

『空也上人絵詞伝』下等に見える。

『百座法談聞書抄』は、天仁三年(一一一〇)二月二十八日から、ある内親王の発願によって百日間、つづいて二百日、合計三百日の間、毎日法花經を一品、阿彌陀經と般若心經をそれぞれ一卷ずつ講じられた時の説經の聞書である。一方、空也が東山の西光寺(後に弟子の中信によって六波羅蜜寺と改称)において入滅したのが天禄三年(九七二)九月である。従って約一四〇年間の距離がある。

『百座法談』と前後する時期に『今昔物語集』が成立している。右の空也説話が如何なる事由に基づくのか、現存本『今昔物語集』には見えない。現存本は卷十八が欠卷になっている。卷十七・卷十九の前後関係から推考すると、欠卷十八は本朝付仏法と思われる。卷十六は観音靈驗譚、卷十七は地藏・菩薩・諸天の靈驗譚、卷十九・二十は因果応報譚である。恐らくは欠卷十八は諸僧の靈驗譚かと考えられる。今一つ注目したいのは卷十五の往生譚である。

空也をめぐる人々のうち、僧侶関係者として慶滋保胤・天台座主延昌・余慶、更に千観などがある。保胤は『日本往生極楽記』で、延昌、空也(弘也)、千観の順序で配列している。しかるに、『極楽記』にあつて『今昔』の卷十五に載つてない説話として延昌、空也がある。因に延昌は卷十五第二七話「北山御取法師往生語」に、空也は卷十九第三話「内記慶滋保胤出家語」に僅かに記されているに過ぎない。延昌、空也を主人公とする説話が収載されていない。延昌・空也・保胤などの往生説話がとりあげられていないことなど、卷十五の編纂意識については中野猛氏にすぎれた論考がある。空也説話は欠卷十八にその謎を解く鍵があると思われる。

『百座法談』では二月二十九日——三月九日の導師であつた香雲

房阿闍梨、三月八日の条に本朝の話として、空也と松尾明神対面説話が初出する。香雲房の師は三月二日の条に「我山王院の大師の釈を見に」と見えることから、三井寺の開祖、智証大師円珍を指している。佐藤亮雄氏によれば、香雲房は智証門徒であり天台宗の僧侶である。天台僧の説經に注目したい。この話の典故は未詳である。

『百座法談』の二十日分の説經の中に、なぜ本朝譚が一話だけ含まれているのであろうか。香雲房の各説經の出自は、『法華伝記』・『法苑珠林』・『経律異相』・『三宝感応要略録』等である。三月八日は「法師品」即ち「法華經」第十品の説經で、「此品の心は、仏の、御ころをもて持経者をなむはむき給、とのたまへる品也」と説き、司馬遷が病人をかかえ困窮していた折、西王母が降り来たつて賜衣する。この衣を病人に着せたと、ことごとく病気が治癒したという例話を語っている。ここでは「慈悲忍辱の衣にはむかれなむ人は、悪業煩惱の病もすなはちのぞか」れることが強調されている。『法華經』「法師品」第十の後部には、

善男子、善女人は、如来の室に入り、如来の衣を着、如来の座に坐して、しかしてすなわち、応に四衆のために、広くこの經を説くべし。如来の室とは、一切衆生の中の大悲心、これなり。如来の衣とは、柔和忍辱の心、これなり。如来の座とは、一切法の空、これなり。この中に安住して、然して後に、懈怠ならざる心をもって、諸の菩薩及び四衆のために、広くこの法華經を説くべし。(岩波文庫本『法華經』中に拠る)

と菩薩行者の人生に処する態度が端的に表現され、更に社会布教の使命付与が強調されている。『百座法談』所載の空也説話は、右の弘經の三軌と称せられる思想を基盤として、法華經礼讃と書与が説かれていられると思われ。香雲房が松尾明神の「法華の衣」を説いた

背景として、次の理由が指摘出来よう。

①十世紀には既に神仏習合が行われていたこと。

②法華経の奇瑞と書写が盛んに説かれていたこと。

③「法華の衣」説話は、少なくとも十一世紀中ごろには成立し、

口承されていたこと。

④とりわけ天台宗寺門派の僧侶関係者によって伝承されてきたこと。

右の四点の根本的問題として、空也と松尾明神との関わりを如何ように解明するか。ごく率直な疑問「なぜ松尾明神でなければならぬのか」という問題提起が発生して行く。松尾明神は「延喜式神名帳」に山城国葛野郡松尾神社と載る古社である。祭神は大山咋神、市杵島姫命の二座を祀る。「古事記」によれば、

大山咋の神、またの名は山末の大主の神、この神は近つ淡海の国の日枝の山にます。また葛野の松の尾にます、鳴鏑を用ちたまふ神なり。(角川文庫本に拠る)

とある。大山咋神は松尾の神であり、比叡山に鎮座する日吉山王社の神でもある。従って、ここに空也と比叡山、空也と松尾明神との関わりが窺える。空也と叡山との関係は、天曆二年(九四八)四月、空也が叡山に登り、天台座主延昌について受戒、光勝という大僧名を得たのをもって始めとする。三年後の天曆五年(九五二)京畿に悪疫が蔓延したが、例えば『元亨釈書』は「死屍相枕也、憐之自刻二十一面大悲像一祈之、像成疫止、其長一丈、於洛東勸四衆一創一藍、号六波羅蜜寺、奉安像焉也」と記している。換言すれば、六波羅蜜寺の建立は悪疫流行に端を発していると言えよう。かような点から推考すれば、松尾明神が空也に与えた仏道成就の加護は、右に示した悪疫退散の祈願に関連していると考ええる。更に、六

波羅蜜寺を主体とする空也念仏布教の起りを意味していると思われる。

次に、松尾明神は京都の守護神として古来から朝廷に尊崇されていた。また、賀茂社と密接な関係にあったことが、逸文『山城国風土記』所載の『积日本紀』に見える。それによると、大山咋神は賀茂別雷神社(上鴨神社)の祭神別雷神の父である。鳴鏑は丹塗矢となっている。火雷神(松尾明神)が丹塗矢と化して瀬見の小川を流れ下り、玉依姫と結婚して賀茂別雷神を生んだという。従って、本話において松尾明神の代わりに賀茂明神が登場することはあり得ない。長明は松尾明神を評して、「是、大通知勝仏の垂跡にておはしますべし。国を助け佛法を守らんが為に跡を垂れ給へば、上人の徳を尊びて、法施を請け給ふ」と述べている。これを承けて『三国伝記』も「松尾大明神ト申ハ、大通智勝仏ノ変作、我が朝第三ノ垂迹也」と記している。

第三に、本話において空也が雲林院に住居していた頃とし、「京になすべき事」があつて大宮大路を南へ迎っていたのは、北小路猪熊(猪隈とも書く)を目ざしていたと推測される。また、松尾社の御旅所は「山城名勝志」・「和漢三才図絵」などによれば、「在西七条南猪隈西」と見える。右のことから松尾社及び松尾社御旅所と雲林院とは距離的に近いと思われる。ただし、六波羅蜜寺と雲林院とはかなりの距離がある。以上の点から本話は、西光寺(後の六波羅蜜寺)建立直前の空也に焦点を置き形成されたものと考えられる。松尾明神との対面が六波羅蜜寺の起源と関連しているのである。

第四として、六波羅蜜寺の鎮守神は松尾明神である。「雍州寄志」(巻四)によれば「六波羅蜜寺、在建仁寺南、(中略)今新義真言宗僧守之、鎮守松尾明神、而空也上人之所崇也」と見え、「山州名

「跡志」(卷三)にも「鎮守社、在開山堂南、所祭松尾神」と記載されている。第五として、松尾明神が法華經読誦を聴聞し、持経者を擁護することは、例えば『元亨釈書』卷第十二(最福寺延朗上人の条)にも見える。以上の五点が空也と松尾明神との関わりについての私見である。

三

次に、本話を考察するに当って、一考を要する点は左に記す『宝物集』の一文である。法華經読誦について述べている。

伝教大師、宇佐の宮にて講読せしかば、八幡大般若つ、むらさきの衣を布施にしまひき。空也聖人、大宮川にて是をよみしかば、松尾の大明神、寒夜のくげんをまぬかれ給ふ。いはんや後世の資糧とならん事、あにうたがひをなさんや。

『宝物集』になぜ伝教大師と宇佐八幡宮、空也と松尾明神との関連を如実に示す話が収載されているのであろうか。神仏習合を物語っている事例であるが、恐らく伝教大師説話が空也説話に投影されているのではあるまいか。『今昔物語集』(卷第十一第十話)によると、伝教大師最澄が延暦二十四年(八〇五)唐より帰朝後、海路の無事を感謝して宇佐八幡宮で法華經を説誦していると、社殿の中から妙なる神の声がした。

「聖人、願ヘル所、極テ貴シ。速ニ此ノ願ヲ可遂シ。我レ、専ニ、護リヲ可加シ。但、比ノ衣ヲ着テ薬師ノ像ヲ可造奉シ」トテ、御殿ノ内ヨリ被投出タリ。是ヲ取テ見ルニ、唐ノ絹、滋ク紫ノ色ニ染テ、綿厚ク□タル小袖ニテ有り。是ヲ給リテ、礼拝シテ出ヌ。其後、返テ比叡山ヲ建立スルニ、彼ノ淨衣ヲ着テ、

「自カラ薬師像ヲ造奉レリ。」(日本古典文学大系本に拠る)

右の説話は多くの最澄伝に収録されている。神と仏との関係を示す話は、空也の法華衣以前に伝教大師説話に窺えるのである。紫衣・小袖の靈力の存存が認められるのである。法華經信仰と神祇信仰を説いていると思われる。最澄は八幡大菩薩から紫衣を賜わり、比叡山寺を建立し薬師像を造った。空也は法華衣を松尾大明神に奉り、十一面觀音像などを刻し、災疫を祈り洛東に六波羅蜜寺を建てた。これらは天台宗系僧侶関係者による伝承と思われる。なお、叡山と宇佐八幡との関係は叡山山王七社の一に撰社宇佐宮(聖真子権現)の鎮座によって明白である。私はここで宇佐八幡と空也との関わりについて若干検討してみたいと思う。『豊後国志』によると、

釈光勝……「天曆中、遊化此邦、於国前創興導寺、速見八坂建利益寺、並栖居焉。」天曆中、寓此郡創朝日、小武、利益三寺、又利益寺、前叡竹中、結小堂、空也肖像今尚存。

と見え、大分県の国東半島に遊行したことを伝えている。また、近藤喜博氏によると、六郷満山の一、日出町赤松の願成寺は天徳四年(九六〇)空也の開基と伝え、更に宇佐市下時枝の善光寺には江戸時代の空也木像と金鍍二口を伝えている¹⁸といわれる。いずれも空也念仏聖達の拠点であったのかも知れない。空也に因する説話のうち、空也の臂の曲ったのを余慶僧正が祈り直したという靈驗奇瑞説話は、『打開集』二十六・『宇治拾遺物語』卷十二の六などに見える。空也と親交のあった第二十代天台座主余慶は筑前国早良郡の宇佐氏の出身と伝えられている。臆測ではあるが、余慶が宇佐八幡宮に関わりある宇佐氏の出自とすると、空也と宇佐八幡との関係をより一層明確に表わすことが可能と言える。

ところで『撰集抄』卷五にも空也と宇佐宮に関する記事が見える。

眞繁の宇佐の宮と申は、山城の男山の景色にたがはず。ながき山四方にめぐりて、松風心すごく、猿の声ことにあはれなる所也。山のそびえたるすがた、木の生ひたるありさま、ひとへに補陀落山かと疑ふ。中に清水あり、みたらひとは是ならん。なにわぎにつけても心澄みぬべき御社也。空也上人に対して御姿をあらはし、(下略)。(岩波文庫本に拠る)

右の話は「津州小屋道路通世事」の冒頭文で、西行に仮托された主人公が宇佐を訪れ感動を述べたものである。この記事は空也と宇佐宮の清水との関連を述べていると思われる。空也の出自を水の流れより生じたとする化人説話が、『閑居友』・『撰集抄』等に採録されている。化人説話成立の背景に宇佐宮との結縁が窺えるのであるまいか。後考を俟ちたいと思う。

四

『百座法談』香雲房の説経に「空也ひじりといふいとやむごとなき人侍けり」とあるに対して、『発心集』にはこの種の表現は見えない。ただ長明は空也を「我が国の念仏の祖師と申すべし。即ち法華經と念仏とを置いて、極楽の業として、往生を遂げ給へるよし見えたり」と結んでゐる。香雲房は空也の出自が高貴であることを強調し、雲林院と結び付けてゐる。跋文は「何忍や、書写供養の御ちからに、私の御はぐままれて□まつらせ給なば、罪業すなはちのぞかり御しぬらむ」と記してゐる。右の文以外は『百座法談』と『発心集』はほぼ同文と言へる。『発心集』は『百座法談』からの書承に基づいて採録し、『古事談』からの書承ではないと思われ。『古事談』は国史大系本で僅か全文九行の本文である。

『古事談』

①我ヲバ、松尾明神トゾイハレ侍。般若ノ衣ハ叱々着侍ト、法花ノ衣無下ニ薄シテ、妄想顛倒ノ嵐ハゲシク、悪業煩惱ノ霜アツクシテ、如此サムク侍也。

②ヤガテ着給テ、気色モ忽ニ直テ、法花衣ヲ着侍ツルヨリ、悪業ノ霜キエ、煩惱ノ嵐モ吹止テ、イト／＼アタムカニ成候ニタリ。仏ニナリ給ハムマデハ可護テ、上人ヲ礼シテ去給ニケリ。

『発心集』

①己は松尾の大明神なり。妄想顛倒の嵐はげしく、悪業煩惱の霜あつく侍る間、かく寒たへがたきなり。

②今は此の法華の衣を著て、いと暖かに成りたり。是より後は、仏道なり給はんまで、まほり奉らん。とて、聖をふし拝みて、去り給ぬ。

『発心集』では『古事談』の傍線部分が欠漏している。『百座法談』の①は「をのれは松尾大明神となむいはれ侍。をのれが身には、人々まうできて法施をたぶに、般若の衣はおのづから侍。法花の衣のはべらで」と見え、ほぼ『古事談』と同文である。②も殆んど同様である。従って『古事談』は『百座法談』から依拠してゐる。『発心集』は頭初に説話、次いで長明の評論、更に『日本往生極楽記』など先行空也伝からの引用、末尾は長明の空也評という四段構成である。『発心集』における空也説話中の登場人物は、師弟関係にある千観及び源信のほか、證空、更に松尾明神であるが、特に第七は二話連続して収録されている。『古事談』では増賀のあとに空也と松尾明神、大納言師氏と空也、空也と和泉式部と三話連続して採録されている。長明と同様に源頭兼も空也に並ならぬ関心を持ってゐたと思われ。

さて、空也をめぐる諸説話のうち、(一)の説話は『百座法談』、(二)

の説話は『打聞集』がそれぞれ初出で採録されているが、両書共、説経の聞き書である点に特徴が認められる。口承的伝承であったと考える。国東文麿氏は「今昔の成立は凡そ一一〇年―一二五五年頃と推定され、打聞集の成立は一一三四年である」と述べておられるが、(一)(二)の説話が共に『今昔物語集』に採録されていないのは不可思議である。『百座法談』・『打聞集』採録の伝承経路に天台宗僧侶(念仏聖)が介在していたと言えよう。

この(一)の説話に空也が雲林院に住んでいた記事が見えるが、空也の出自を仁明天皇の皇子常康親王の子とする説に拠れば、雲林院は常康親王が伝領されたことがあり、空也が住むに關係ある場所と言える。しかし常康親王は貞観十一年(八六八)五月に薨去しており、空也の生誕と合致しない。また、『百座法談』が「延喜の御時きなむどにや候けむ」と記載してある点から推測すれば、醍醐天皇皇子説が有力であるが、雲林院と合わない。例えば、『大鏡』の冒頭部において、物語の語り手である大宅世継と夏山繁樹が若侍を相手に語る場所が紫野の雲林院である。実際の雲林院菩提講は毎年五月に行なわれた。『中右記』承徳二年(一〇九八)五月一日の条によると、源信僧都が結縁のため始めて行ない、その後無縁聖人が夢告によってさらに行なったと見える。天台の名刹であることなどを考慮すれば、空也との関わりが一層強いものとなる。雲林院住居の問題は空也をめぐる人々の検討をも意味する。例えば左大臣藤原実頼、大納言師氏兄弟、天台座主延昌、余慶などとの親交である。いかなる縁故があったのであろうか。空也の皇族出自とかなりの関係があると思われる。もし空也の出自を常康親王の子と仮定するならば、実頼、師氏兄弟の父忠平(貞信公)の母は人康親王の女である。従って人康親王と常康親王は兄弟である。その縁からくる深交とも考

えられる。この問題をも含めて他の問題点の解明は後日を期したい。

注1 『諸門跡譜』によると「上人始者、常康親王男、仁明帝孫、六波羅蜜寺之開基空也法諱光勝、任之、日域上人是始也」とある。(『群書類従』第五輯所収)。

注2 拙稿「閑居友」上巻第四話空也上人説話をめぐって(説話・物語論集)、第二号・昭和四十八年十月 金沢古典文学研究会刊)。

注3 佐藤亮雄氏『百座法談聞書抄』(昭和四十七年九月 桜楓社刊) 解題参照。

注4 日本文学研究資料叢書『今昔物語集』所収(昭和四十五年 有精堂刊)。

注5 佐藤氏「前掲書」に拠る。

注6 筑土鈴寛氏『中世芸文の研究』所収の「唱導文学としての百座法談」参看。(昭和四十一年十二月 有精堂刊)。

注7 出典未詳。なお引用本文は佐藤氏「前掲書」校註本文。

注8 田村芳朗氏「法華経」(昭和四十四年七月中央公論社刊)。

注9 真理を現実実践していくさいの三つの方軌のことで、慈悲と忍辱と空性の三つをいう。田村氏「前掲書」参看。

注10 大山咋神を小比叡神と称す。「比叡山その宗教と歴史」と題する景山春樹・村山修一両氏執筆の比叡山小史は平易だが詳述されている。(昭和四十五年四月 日本放送出版協会刊)。

注11 新訂増補国史大系本に拠る。

注12 筑土氏「前掲書」所収の「浄土教と生活・芸能」参照。

注13 北小路猪熊は大宮大路と堀川小路との間にある南市門を指し七条辺の東市の中を通ることになる。「京になすべき事」は市における布教のことであらうか。

注14 『山槐記』（仁安二年四月五日の条）には「七条西大宮旅所」と見える。

注15 『日本紀略』（応和三年八月二十三日の条）「空也聖人、於鴨川原一供養金字般若経、道俗集会、請僧六百口、自内給所給錢十貫文、左大臣（実頼）以下、天下諸人結縁者多、昼講経王、夜万灯会」とあり、西光寺の建立年代ははっきりしないが、右の大般若経の供養と関係があると思われる。『伊呂波字類抄』には「応和年中所草創也」と記載されている。『元亨釈書』は天曆五年の建立とある。

注16 例えば『法華験記』巻上・『三宝絵詞』下・『拾遺往生伝』巻上・『元亨釈書』巻第一・『日本高僧伝要文抄』第二・『私聚百因縁集』巻第七など。

注17 堀一郎氏『我が国民間信仰史の研究』（宗教史編所収の第三部）「我が国民間信仰史の形勢と機能」より所引。
（昭和二十八年十一月 東京創元社刊）。

注18 『四国通路』の註記参看。（昭和四十六年六月 桜楓社刊）。

注19 『古事談』・『三國伝記』も空也を高貴の素姓とする説明は全くない。

注20 「打聞集攷」―その文学―（『打聞集』研究と本文所収、昭和四十六年八月 笠間書院刊）。

注21 『本朝皇胤紹運録』など。
注22 松村博司氏『歴史物語』（昭和三十六年十一月 塙書房刊）など参看。
（付記）①本稿は昭和四十九年度説話文学学会大会での口頭発表『発心集』第七「空也上人脱衣奉松尾大明神事について」の骨子をなす論考である。原稿提出締切が学会前

であったため、発表後、諸先生からいただいたご高教に基づく修正を加えることはしていない。

②東京教育大学名誉教授山岸徳平先生、大妻女子大学教授永井義憲氏、山梨大学教授西尾光一氏、国士館大学教授今成元昭氏、金沢大学助教授原田行造氏、愛知医科大学助教授黒部通善氏、都留文科大學助教授中野猛氏、梅光女学院大學助教授志村有弘氏から懇篤なるご教示をいただいた。紙上を借りて厚く御礼申し上げます。

（金沢工業大学助教授）

▽ 受 贈 雑 誌 △

- | | | |
|---------|-------|-------------------|
| 学芸国語国文学 | 第十号 | 東京学芸大学国語国文学会 |
| 立命館文学 | 1、2、3 | 立命館大学人文学会 |
| 立命館文学 | 4・5 | 立命館大学人文学会 |
| 国文 | 第四十一号 | お茶の水女子大学国語国文学会 |
| 国文学論考 | 第十号 | 都留文科大學国語国文学会 |
| 同朋大學論叢 | 第三十号 | 同朋大學同朋学会 |
| 人文研究 | 第二十五卷 | 大阪市立大学文学部国語国文学研究室 |
| 佐賀大國文 | 2 | 佐賀大学教育学部国語国文学会 |
| 文芸研究 | 第七十七集 | 東北大学文学部日本文芸研究会 |
| 立命館文学 | 6、7 | 立命館大学人文学会 |
| 立命館文学 | 8、9 | 立命館大学人文学会 |